

# 福音のしらべ

## 礼拝を支える「楽器の中の楽器」

2000年以上にわたる歴史の中で、時代や地域によって姿かたちと役割とを変えながら発展してきた楽器、オルガン。その長い歴史と多様な用途、多彩な音色や広い音域などから、「楽器の中の楽器」ともいわれます。キリスト教の教会で用いられるようになってからは、礼拝の祈りと賛美を支え、人々の信仰生活に寄り添ってきました。このオルガンの歩み、仕組み、そして礼拝での役割について、今号と次号の2回にわたってご紹介します。

### オルガンの誕生と発展

オルガンが発明されたのは、紀元前250年頃のこと。その原型「水オルガン」は、現在のエジプトのアレクサンドリアあたりで生まれたといわれています。その後、次第に風を用いて音を鳴らす仕組みへと変化していき、時を告げたり、要人の到着を知らせたり、人々を鼓舞したりするための「道具(オルガノン)」は、やがて楽器へと発展していきます。中世になると西方世界に広がり、教会で用いられるようになりました。

### 教会音楽とともに

中世からルネサンス、バロック時代にかけて、礼拝においてオルガンは、聖職者の歌唱や会衆賛美を支え、聖歌隊と歌い交わし、また独奏によって祈りや黙想を深めるといった役割を担ってきました。地域ごとに異なる音色や様式が育まれ、それとともにオルガンの楽曲も生まれ、オルガン製作の技術も発達し、それぞれの教会文化を映し出す存在となりました。

文：大学オルガニスト 松浦 光子

# 大学オルガニストの先生にお話を伺いました



## 坂戸 真美 先生

### ●オルガニストになったきっかけは？

小学6年生のとき、生まれて初めてコンサートホールでパイプオルガンと出会いました。無数のパイプを持つ不思議なヴィジュアルに大きなインパクトを受け、ひと目ぼれて、「この巨大な楽器を絶対に弾きたい!」と強く思いました。その時は、オルガニストが一生の仕事になるとは思ってもみませんでした。オルガニストとして生きる道を与えてくださった神さまにいつも感謝しながら音楽をお奉げしています。

### ●大学のオルガニストとして何を心がけていますか？

讃美歌の伴奏をするときは、主に向かって声高らかに歌う皆さんと呼吸を合わせるように努め、歌詞を芯から受け止め、心を合わせて歌いながら弾きます。前奏・後奏は様々なタイプの曲を選びます。オルガンは歴史が長いので、作品が非常に多く、多種多様です。オルガンの魅力を知っていただくと同時に、それぞれの国、それぞれの時代の祈りとメッセージを伝えたいと願っています。

### ●あなたにとってパイプオルガンとは？

長年、オルガンのパイプに風を送りながら夢を追いかけて、祈り続けてきました。喜びも悲しみもシェアしてきた親友のような存在です。同時に、私を日々成長させ、常に進化させ、沢山のことを教えてくれる恩師のようでもあります。オルガンという楽器は計り知れない可能性を持っているので、そのポテンシャルを余す所なく引き出すことが出来るように、一生をかけて取り組んで行きます。

### ●好きな讃美歌

讃美歌 第二編 212番 神よ、義をもてわれを  
Samuel Sebastian Wesley, 1810-1876



今回、ウェスレー・ホール・ニュースのために、  
坂戸先生に特別に演奏していただきました。

QRコードを読み取ると、今回ご紹介した曲の演奏をお聞かせいただけます。

※動画は都合により、予告なく公開を終了する場合があります。

メソジスト運動を導いたジョン・ウェスレーの弟、チャールズを祖父にもつサミュエル・セバスチャン・ウェスレーによる作品です。その響きには、神への信頼と祈りが静かに息づいています。なお、この旋律は青山学院大学のチャイムとしても親しまれています。

### ●学生の皆さんへ伝えたいこと

オルガンの鍵盤を押してパイプを通った風が、聖なる風となり、チャペルを満たし、皆さん一人一人の心に届きます。泣きたい気持ちの時も、オルガンの音色が心を癒してくれます。ぜひ大学礼拝に出席して、オルガンの伴奏で讃美歌を歌って下さい。心が晴れ渡り、幸せな笑顔があふれることでしょう!